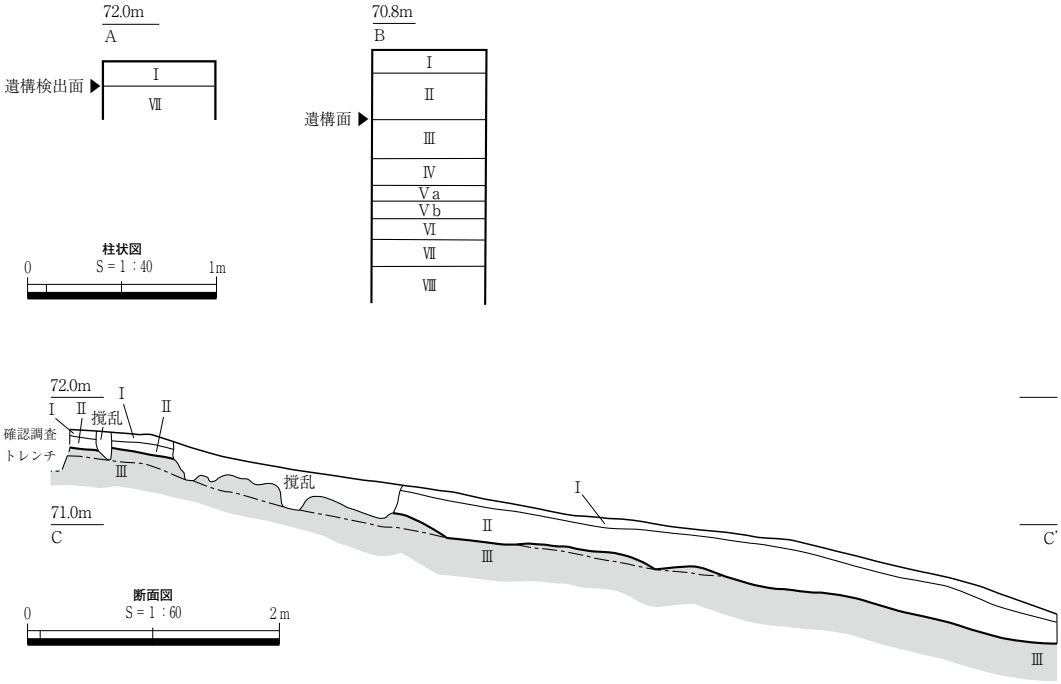


第６図　基本層序概念図

表１　遺構名新旧対照表

新遺構名	旧遺構名
石井垣上河原１号墓	SX 1
石井垣上河原２号墓	SX 2
石井垣上河原３号墓	SX 3
石井垣上河原４号墓	SX 4

新遺構名	旧遺構名
SK 1	SK14
SK 2	SK13
SK 3	SK16
SK 4	SK11

新遺構名	旧遺構名
SK 5	SK 7
SK 6	SK 6
SK 7	SK 9
SK 8	SK 5

新遺構名	旧遺構名
SK 9	SK 3
SK10	SK10
SK11	SK15
SK12	SK 4

新遺構名	旧遺構名
SK13	SK12
４号墓区画溝	SX 5

土（Ⅰ層）直下に露出する。箇所により、硬く固結した火山砂の広がりが確認できる。

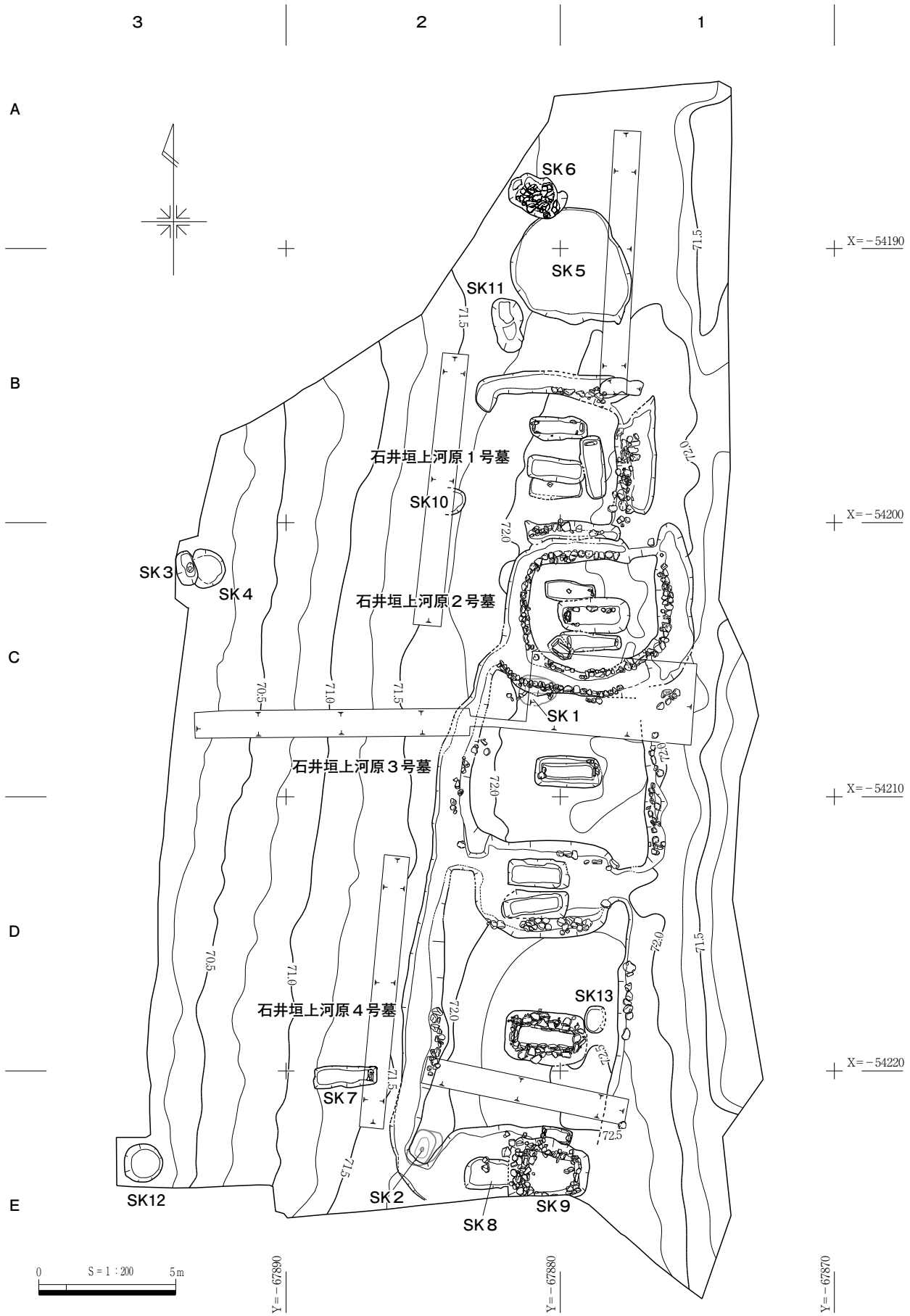
Ⅷ層：にぶい橙色（7.5YR4/4）　ハードロームと呼称される硬質の粘質土層と考えられる。

３　調査成果の概要（第７図、表１）

石井垣上河原遺跡では、古墳時代前期初頭の墳墓４基、弥生時代後期後葉の土坑１基、帰属時期不明の土坑13基を検出した。土坑13基のうち、４基（SK１～４）は形態から縄文時代に帰属する落とし穴と考えられる。遺構名称は調査時と報告時で異なるため、表１にその対照一覧を示した。

墳墓４基（１～４号墓）は、尾根部に連なって検出された。それぞれが貼石を伴う溝により区画される。墳丘の平面形態は１・２号墓が方形、３・４号墓が四隅突出型で、規模はいずれも一辺５～８ｍ程度と小規模（３・４号墓は突出部を含まず）である。隣り合う墳墓の区画溝は重複しており、埋土の切り合いから先後関係を判断した。その結果、四隅突出型である３号墓が最初に築かれ、その後２号墓もしくは４号墓、１号墓の順に構築されたことが判明した。埋葬施設は各墳墓に１～４基を確認した。木棺直葬と考えられる土壙を主体とするが、２、４号墓では箱式石棺を採用している。副葬遺物については皆無であった。遺物は、墳丘から転落したと考えられる土器が区画溝内から出土し、各墳墓出土土器の特徴が大きく異ならないことから、比較的短期間に築造されたと考えられる。

【参考文献】
鳥取県埋蔵文化財センター 2012『下市築地ノ峯東通第３遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書43


3
2
1
A
B
C
D
E
SK６
SK５
SK11
石井垣上河原１号墓
SK10
SK３
SK４
石井垣上河原２号墓
SK１
石井垣上河原３号墓
SK13
石井垣上河原４号墓
SK７
SK12
SK２
SK８
SK９
X=－54190
X=－54200
X=－54210
X=－54220
Y=－67870
Y=－67880
Y=－67890
0
S＝1：200
5m

第７図　遺構配置図

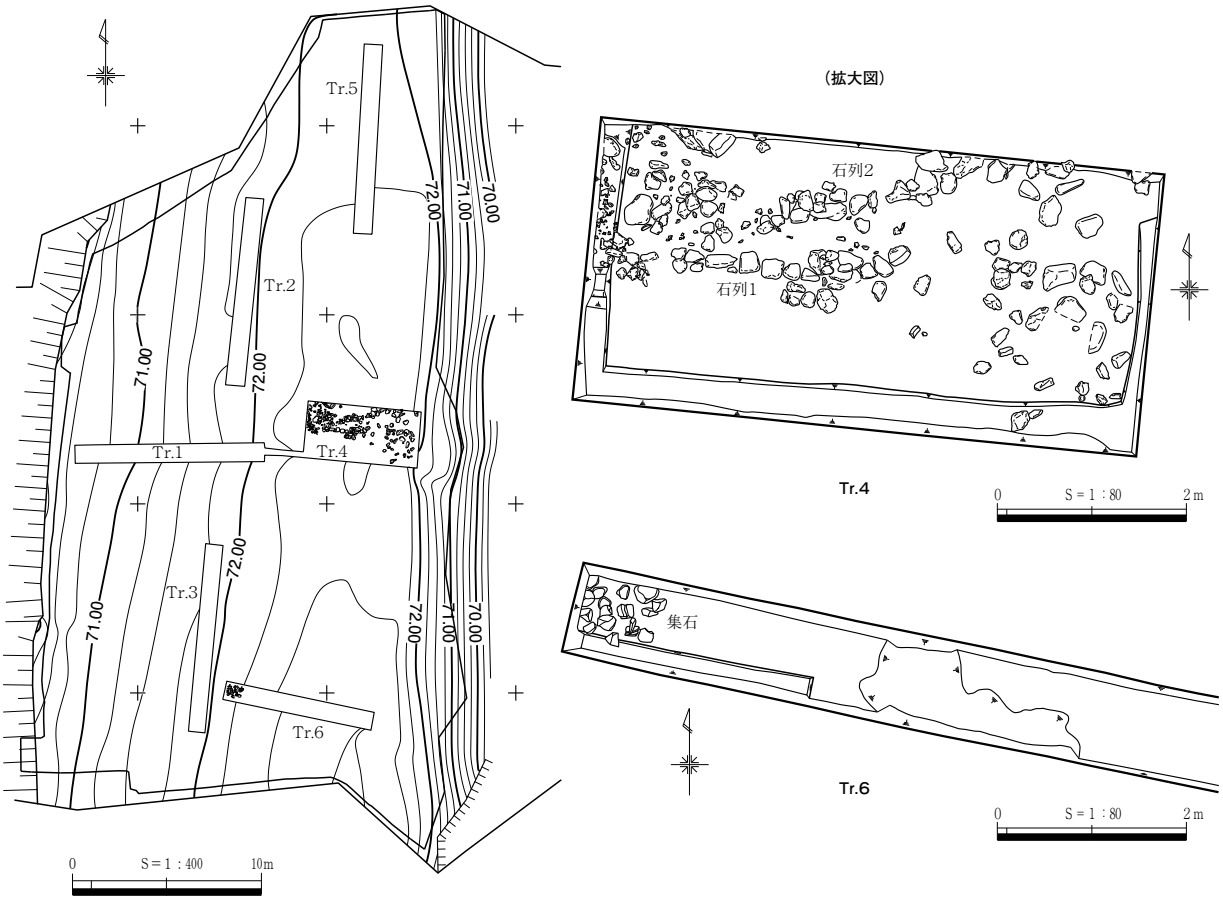
第２節　遺構

１　墳墓

概要（第８～15図、PL.４～６、写真３～10）

調査の経緯・経過　本発掘調査に先立ち平成22年度に実施した確認調査では、トレンチを６箇所設定した（Tr.１～６）。調査の結果、Tr.４・６で石列と集石を確認した（第８図）。石列、集石を構成する礫はほとんどが河原から採取した円礫、亜円礫であった。Tr.４では概ね並行して東西方向に延びる石列を２基検出し（石列１・２）、トレンチ断面の土層観察から、これらの石列には溝状の落ち込みが伴うことを確認した。礫は溝掘方に沿って設置されていることが窺え、石列検出時に弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と目される土器片が併せて出土した。これらの調査所見と狭小な丘陵上にあるという立地条件を勘案し、石列は墳墓に伴う可能性が高いと判断した。また、南側で設定したTr.６においても、同様な円礫からなる集石状の遺構が確認でき、尾根部一帯に墳墓の存在を想定するに至った（鳥取県埋蔵文化財センター 2012）。

以上の確認調査結果を受け、墳丘を有する遺構の存在が想定されたことから、平成23年度の本発掘調査は表土（Ⅰ層）掘削を人力で行うこととし、調査区に土層確認用ベルトを設定し（第12図）掘削に着手した。Ⅰ層に続いて遺物包含層であるⅡ層の掘削を行い、Ⅱ層下での遺構検出作業を開始した。Ⅱ層は掘り下げ過程で精査を行ったが、土壌化の進行のため本層からの掘り込みは確認できなかった。



※　トレンチ番号（Tr.）は平成22年度確認調査トレンチ番号である。

第８図　平成22年度確認調査で検出した主な遺構配置

写真３　平成22年度確認調査Tr.４石列検出状況（西から）

写真４　表土剥ぎ風景

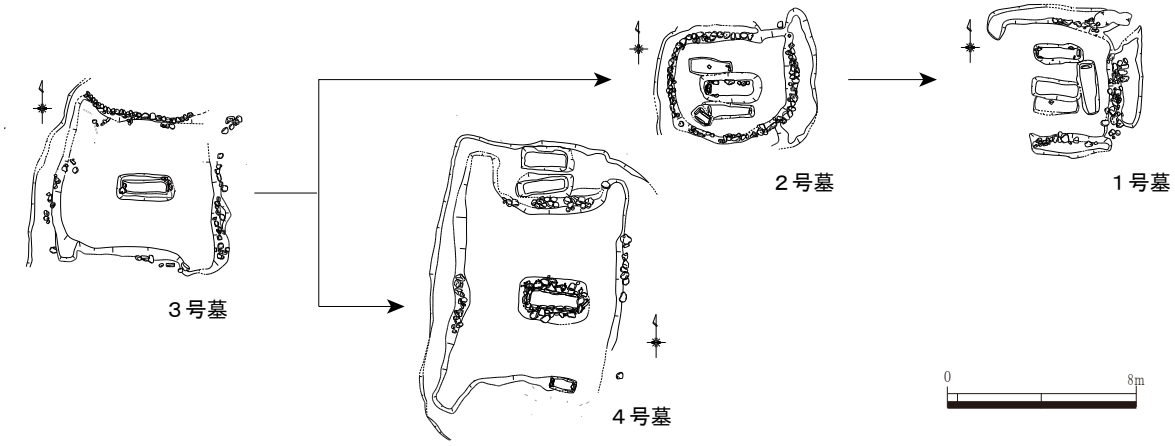
写真５　Ⅱ層掘削、遺構検出作業風景

Ⅱ層中において墳墓に伴う礫が検出されはじめることも、土壌化の進行を示唆している。

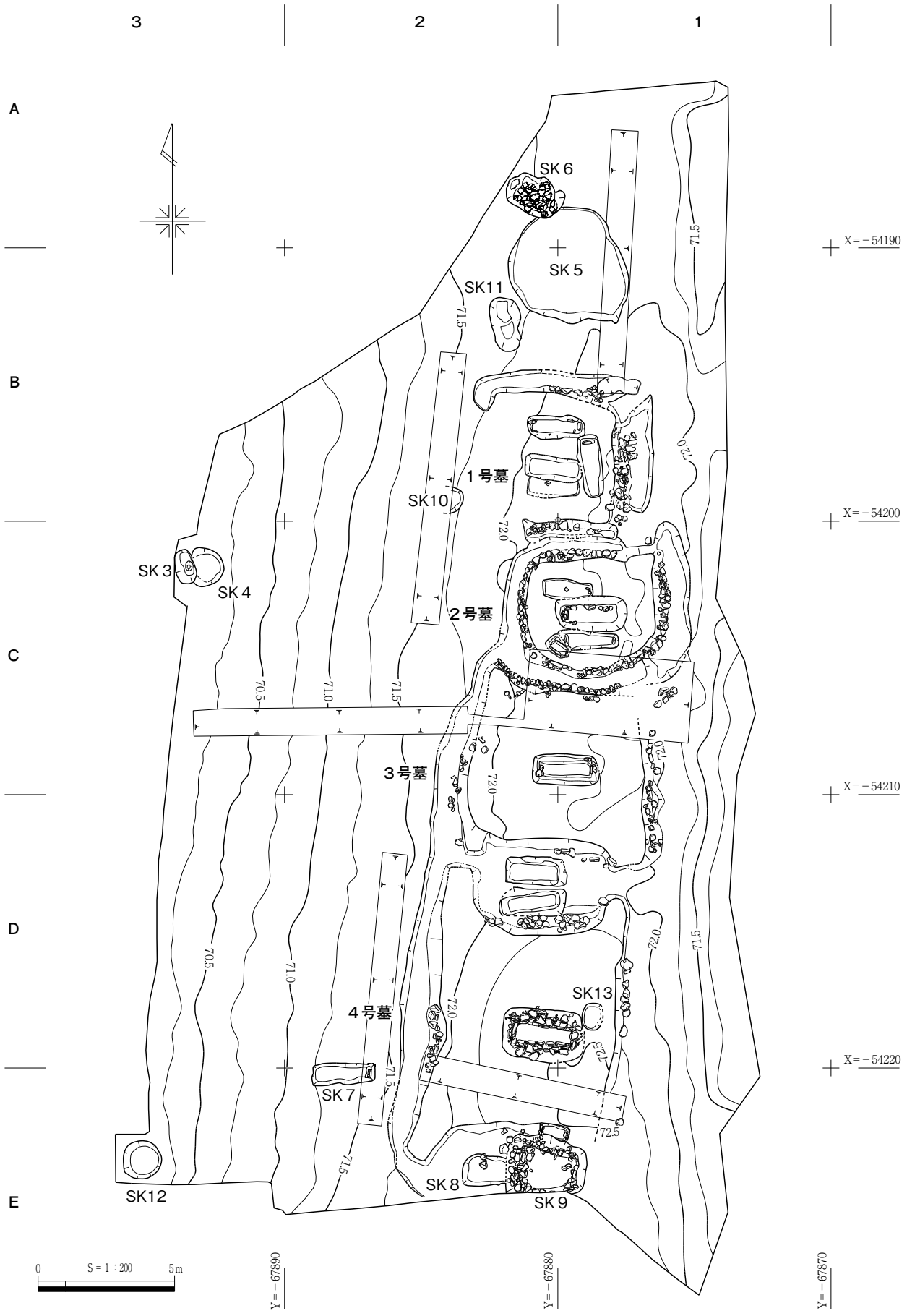
Ⅱ層下における検出作業を進めた結果、溝により区画され、墳丘斜面、墳裾に貼石を伴う墳墓を４基検出した（第10図）。４基の墳墓は南北方向に延びる丘陵尾根部に連なり、名称は北から順に１号墓、２号墓、３号墓、４号墓とした。墳丘の平面形は、１号墓、２号墓が方形、３号墓、４号墓が四隅突出型である。ただし、１号墓の区画溝は西辺が確認されず、詳細は不明である。

１号墓北側の尾根部では、土坑を３基（SK５・６・11）検出したが、墳墓に関係する遺構は認められなかった。ただ、調査地外において現況で河原石が散見され、墳墓が現存する可能性はある。一方、調査地南側は４号墓の区画溝南辺が調査地境にかかり、以南の状況は不明だが北側と同様に河原石が現況で確認でき、該期の土器片も表採することから、墓域が継続する可能性は高い。

区画溝　検出面からの深さは、深いところで40cm程度、他は10～30cm程度の箇所が多く、遺存状態は良くない。隣接する墳墓の区画溝は重複しており、土層確認用ベルトのA－A’セクション等の土層断面（第14図）で確認した。重複箇所の切り合いから先後関係をまとめると、第９図のように復元できる。四隅突出型の３号墓が最初に築かれ、次いで四隅突出型の４号墓と方形の２号墓が続くが、両者の先後関係は不明である。そして、２号墓の後に方形の１号墓が築造されている。



第９図　墳墓群の築造順模式図



第10図　石井垣上河原１～４号墓

写真６　貼石の遺存状況（２号墓：北西から）

写真７　甲川近景（北東から遺跡方面を望む）

写真８　甲川河原の礫

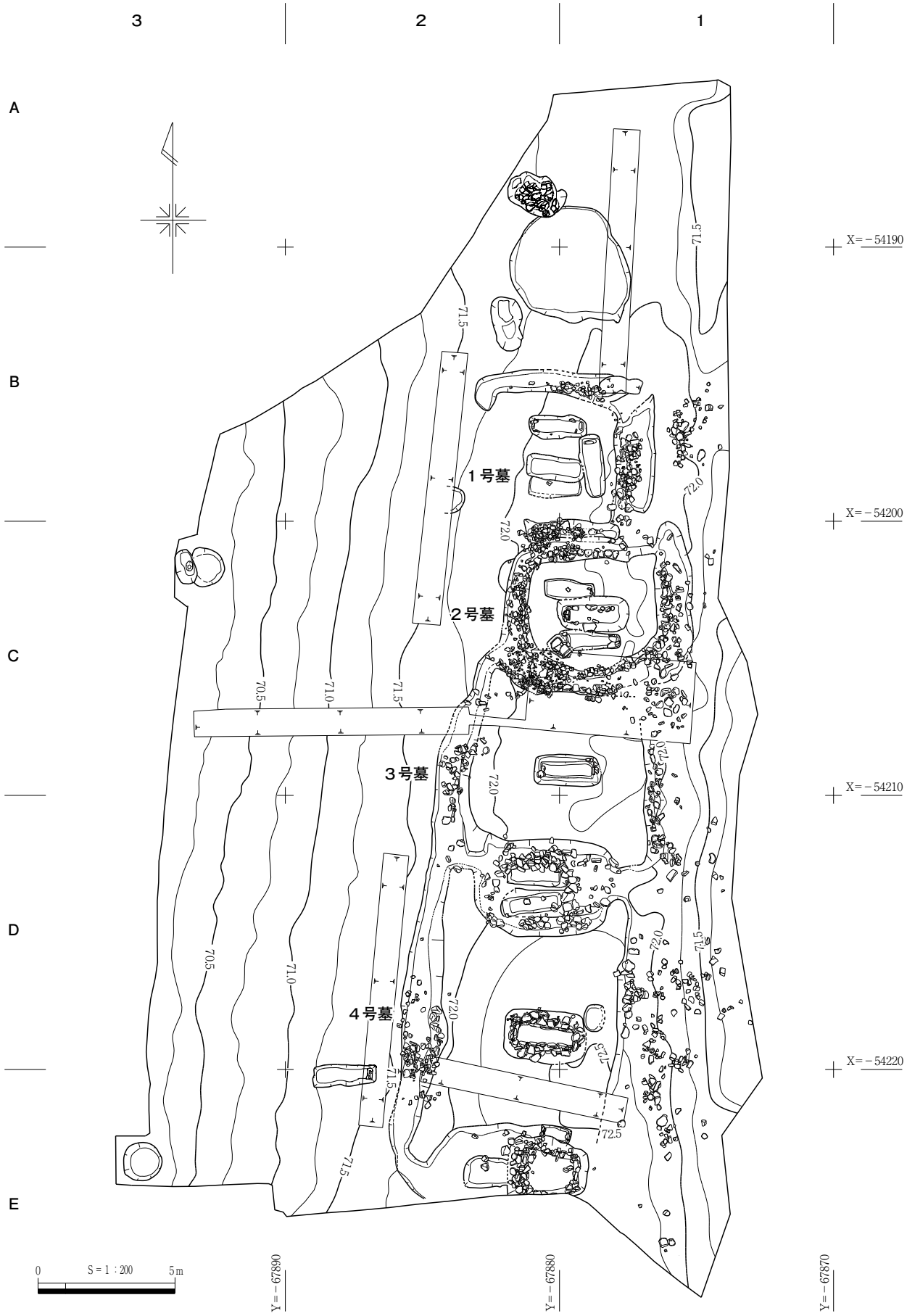
写真９　土坑（SK12）における礫検出状況

貼　石　墳丘に施された貼石は、近接して北流する甲川の河原から搬入したものである(註１)。用いられた石材は、節理が比較的平行で板状となる緻密な安山岩が大半を占める。厚さは５～10㎝程度のものが多い。これらは、船上山系といった古期大山起源の石材である。他には少数だが粗粒で結晶質の安山岩も用いられている。こちらは、新期大山起源の石材と考えられる。両者とも、甲川の河原で容易に採取できるものである（写真７・８）。また、基盤層のⅦ層（ホーキ火山砂層）に由来する固結した硬化火山砂の断片を、裏込めで少数利用している。

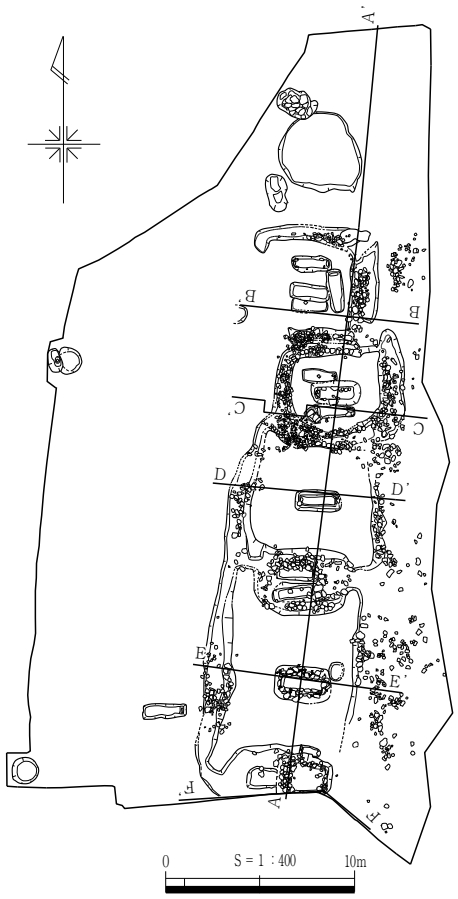
貼石は、多数が後世の撹乱等により二次的に移動していた（第11図）。樹木根の撹乱により移動したもの、流出により東側の急斜面に転落したもの、SK12に見られるように廃棄など後世の人為的な移動が想定されるもの（写真９）、土坑SK９といった墳墓より後に営まれたと考えられる遺構に転用されたもの（写真10）を調査地内で確認した。その他では、１号墓の東側において、貼石と同じ礫が集石状となる箇所を確認した（第13図）。礫群に伴う明瞭な掘り込みが無いこと、礫の配置にも規則性が認められないことから、これも後世の二次的な移動を想定している。

原位置を概ね保っていると判断した貼石を示したのが第10図である。１号墓、２号墓は貼石が一定数遺存し、墳裾付近に限られるものの貼石の設置状況をある程度窺うことができる。石の据え方は、ほぼ全てが石材の広い平坦面を外へ向け、墳

写真10　SK９



第11図　石井垣上河原１～４号墓礫検出状況



第12図　１～４号墓土層断面記録位置図

第13図　１号墓東側集石

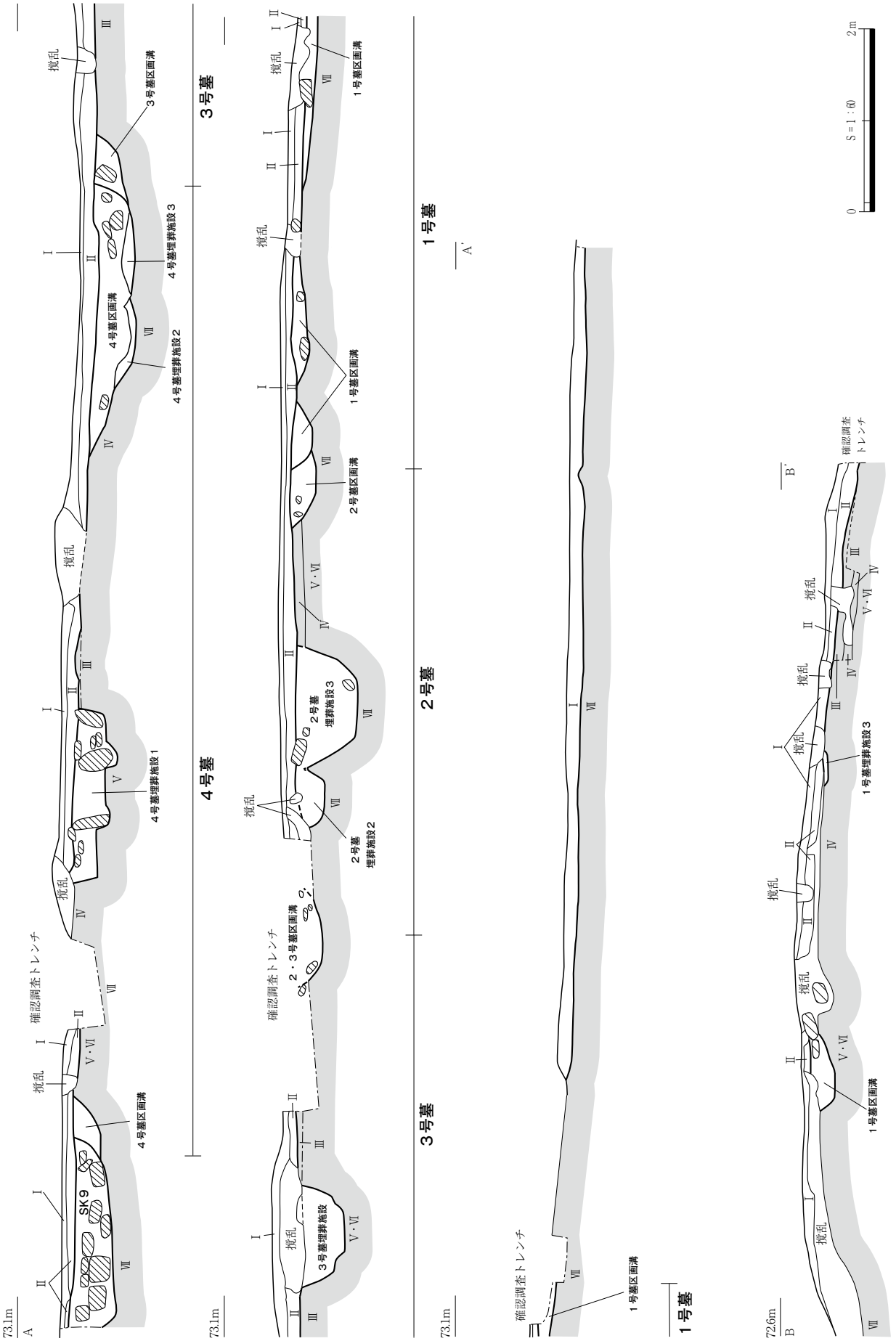
丘斜面に沿い40～60度程の傾きで設置される。据えた石の長軸については縦向きと横向きが混在し、それらを組み合わせることにより、石組における各段の高さを揃える意図が窺える。各石に生じた間隙及び背後には裏込め土を施し、石組を補強している。四隅突出型の３・４号墓は１・２号墓と比較して貼石の遺存が不良で確認できる範囲は断片的であるが、基本的な手法は同様である。

墳　丘　いずれの墳墓においても、明瞭な盛土は確認していない。第14・15図に示したとおり、Ⅱ層の下はクロボクのⅢ層、もしくは漸移層(Ⅳ層)以下の基盤層が露出する。後に詳述するが貼石の崩落状況から勘案すると、土壌化、斜面への流出を繰り返した結果、盛土が失われた可能性は十分考えられる。ただ、墳丘の存在はそれほど顕著ではなく、低墳丘と想定できる。

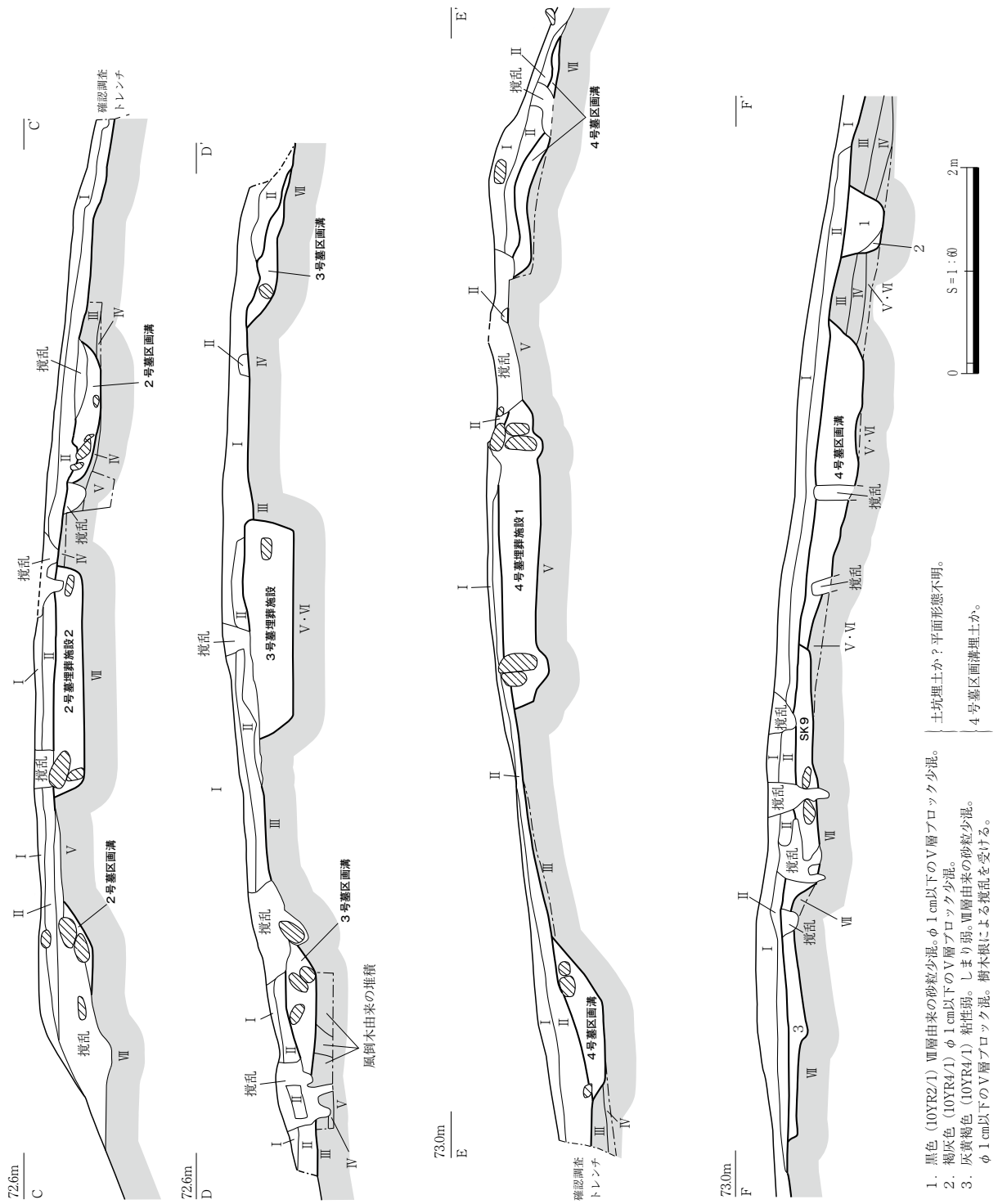
埋葬施設　区画溝と同じくⅡ層下で精査を行った結果、１号墓は４基(木棺３、土壙１)、２号墓は４基(木棺２、石棺１、土壙１)、３号墓は１基(木棺)、４号墓は４基(石棺１、木棺１、土壙２)の埋葬施設を確認した。ただし、１号墓の埋葬施設３や２号墓の埋葬施設１のように遺存状況が極めて不良で墓壙掘方の大半を欠き、木棺か土壙か判別不能なものは土壙に含めている。また、４号墓の埋葬施設のうち、３基は区画溝内の検出である。様相をまとめると、木棺を主体的に用いる傾向にあるが、２号墓、４号墓では貼石と共通の石材で構築した箱式石棺を採用している。また、木棺の裏込めに河原石等の礫を設置する例が目立ち、棺材を保持する意図が窺える。

埋葬施設からは、埋没時に棺内へ流入したとみられる土器細片がわずかに出土したが、棺内、棺外共に明確な副葬品は出土していない。

出土遺物　墳丘上からの出土は少なく、そのほとんどは区画溝からの出土である。いずれも墳丘上にあった



第14図　１～４号墓土層断面図（１）



第15図　１～４号墓土層断面図（２）

ものが転落したと考えられる。したがって、墳丘上における祭祀行為や葬送儀礼が窺えるような出土状況は認められていない。出土土器の年代観は古墳時代前期初頭に位置付けられる。墳墓間の土器の特徴に大きな差異は無く、比較的短期間に継続して築造されたと推察できる。

以上、墳墓群全体について概観した。次に、各墳墓の詳細を述べる。